第 3 章　基本理念

前回の県ジョンでは、本県の都市づくりのあるべき姿を以下のように考え、「基本理念」として定めた。この基本理念は、1.3 の県ビジョン改定の視点に照らしても、継承できるものである。

◆ 人と自然、都市と農山村が共生する都市づくり

本県の特性は、豊かな自然環境にあるといっても過言ではない。これを背景にして、美しい風景を楽しみ、各種産業を営み、余暇や保養を楽しみ、良好な環境に居住する生活の豊かさを実現してきた。今後の都市づくりにおいても、こうした自然環境がもたらす恵みを大切にし、共生し続けることが、これまで培ってきた生活の豊かさをより増進させることにつながる。

生活の豊かさは、都市が発展･成長型から安定･成熟型を求める時代へと転換してきた背景を踏まえると、今ある自然･居住環境を良質な状態で維持しつつ、日常的かつ身近に余暇やレクリエーションを楽しみ、さらには地域の歴史や文化に親しむことなどを通じて、個々人が実感できる方向に重点が置かれる必要がある。さらに、県民自身がそれぞれの生活や風景に誇りを持ち続けることが大事である。

◆ 市街地から田園･山間地までを視野に入れた都市づくり

本県の都市は、古くは城下町や宿場町･門前町として発展し、その基礎がつくられてきた。明治以降はその基礎を活かしながら、養蚕などの地場産業や水資源を活かした工業開発を進め、人口と産業の集積が図られた。都市計画においても、これまでは専ら市街地を中心にした整備･開発が主要課題であった。

しかしながら、人々の活動範囲は市街地だけに限定されたものではなく、山岳や湖沼、温泉など豊かな自然資源を背景にして、観光･保養地としても発展してきた。また農山村もこのような豊かな自然を背景として、地域性を活かした多様な生産物を全国に提供するなど、農業県としての側面も有する。

そうしたなか、近年では、生産活動の基盤となる田園や山間地にも人々の活動範囲は広域化するとともに、市街地内外の人口逆転現象やこれに伴う田園風景の悪化なども生じてきた。これまでは発展の核は市街地であったが、今後はこれを再編しつつも、県土全体を見据えて、都市と農山村との関わりや土地利用のあり方も視野に入れた都市づくりが必要な時代に移り変わってきた。

◆ 生活者自身が協働で育てる地域社会づくり

都市型社会の進展により、地域固有の歴史･文化、自然環境などが姿を変え、またそれに伴い人々の生活形態も、核家族化の進行や地域コミュニティの希薄化などとともに大きく変化してきた。

本県においても物質的な豊かさより精神的な豊かさが求められる時代に転換しつつあり、地域の自然環境や伝統的な文化･技術などを尊重するとともに、人と人とのつながり（縁）を育み、心、知恵、人手が好循環する協働社会の形成が求められる。

このような地域社会づくりを、縁を尊重し、結び直す（結う：地域の光を観る）「縁が結うまち・里・山」と表現し、基本理念は次のとおり設定する。

自分の住む環境を慈しみ、誇りを持ち続けられる地域づくり
～　縁が結(ゆ)う「まち」・「里」・「山」　～

この基本理念のもとに、暮らし、産業、観光の３つの観点で、改定した「都市づくりの方向性」、さらには新たに位置付けた「信州の多彩な魅力を育み都市構造の基本概念」及び「信州らしい都市づくりを推進する施策概念」を踏まえて、次章以降に示す都市づくりの目標、方針及び推進施策へ反映を図り、よりよい都市づくりを展開していく。

《改定の視点》

視点１　「広域連携の深化」と「地域価値の共有・醸成」

視点２　「生活環境の質的向上」と「交流人口の拡大」

視点３　「いまある資源の活用」と「自然環境との共生」

《基本理念》

自分の住む環境を慈しみ、誇りを持ち続けられる地域づくり
～ 縁が結(ゆ)う「まち」・「里」・「山」 ～

《都市づくりの方向性》

〔暮らし〕
環境と共生した多様な暮らしを支える都市づくり

〔産業〕
地域に根差した産業を育む都市づくり

〔観光〕
県土の多彩な“光”を磨く都市づくり

《信州の多彩な魅力を育む都市構造の基本概念》

信州版コンパクト・プラス・ネットワーク

それぞれに魅力ある「まち」、「里」、「山」、
多彩で個性豊かな地域と地域がつながる連携・共生型の都市構造

《信州らしい都市づくりを推進する施策概念》

信州版グリーンインフラストラクチャー

「山」から「まち」まで、
自然環境の機能を最大限に活用した土地利用、都市施設整備、人間活動の展開

都市づくりの目標・方針・推進方策へ反映
（次ページ以降）

基本理念に基づく本県の今後の都市づくり及び県ビジョンの展開フロー